

全国学力・学習状況調査

～結果の傾向と改善に向けて～

平成27年4月に、今後の学習指導や学習環境等の改善に生かす目的をもって、小学校(4校)の6学年及び中学校(1校)の3学年を対象に、国語及び算数・数学、理科(3年ぶり)の学習の到達度・理解度、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の様子などに関する調査が行われました。

学力とは、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などを含めた総合的なものですが、今回はこれらの中でもテストで推し測ることが可能な特定の一部を調査したものです。

■本町の児童生徒の学力傾向

この調査は、基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているかどうかをみる問題A「知識」と、それらを活用することができるかどうかをみる問題B「活用」とに分かれています。

総体的には、小中学生ともに全国・全道を下回っており、特に小学生は顕著になっています。小学生は、国語B「活用」が全国・全道平均を大きく下回っており、国語・算数ともに引き続き二極化現象が見られます。中学生は、国語A「知識」及び数学B「活用」はほぼ全道平均であり、数学では二極化現象が見られます。理科は、特に小学生の「知識」は全国・全道平均を超えており、小中学生ともにほぼ全道平均に達しているものの、3年前の調査よりは下回っています。

学力に関して本町の傾向と課題を明確にするため、平均正答率についてグラフ(レーダーチャート)を使って全国・全道と領域ごとに比較しています。
※次ページ参照

■生活習慣や学習習慣等の傾向

基本的な生活習慣では、小中学生ともに「起床・朝食・就寝」はほぼ全道平均と好ましい傾向となっています。「テレビ等を見る時間が長い」は少しずつ改善が見られ、「家庭学習の時間」も改善の傾向は見られていますが、依然としてテレビ・ゲーム・インターネット等の時間が長く、家庭学習の時間が短いという傾向が続いています。

家庭学習の内容では、小中学生ともに「家で、学校の宿題・復習をする」は全道平均を超えていますが、「家で、学校の予習をする」は不十分という傾向が見られます。

「自己肯定感・有用感をもつ」と「失敗を恐れないで挑戦する」では、小中学生ともに全道平均を上回り、中学生の「将来の夢や目標をもつ」も今回全道平均を上回りました。

「地域などの出来ごとに関心がある」では、小中学生とも全道平均を大きく上回る一方、中学生の一部には「地域などの出来ごとに関心がない」の傾向が高くなっています。

■問題解決に向けての取り組み

学校は、今回の調査結果を踏まえた「学校改善プラン」等に基づいて、基礎・基本の定着に重きをおいた授業改善を図るとともに、学校と家庭との連携・協力のもとに家庭学習の習慣化を更に図ることが重要となります。

1 授業改善に努める

- ❖児童生徒にとって興味・関心のもてる課題を設定し、学力の二極化現象の解消のために個を生かした自力解決を図る活動を推進するとともに、終末段階では学習の「振り返り」や補充学習を重視し、既習事項の定着を確かなものにします。
- ❖児童生徒が意欲をもち、分かりやすい授業を展開するため、学習形態の工夫や実物投影機・電子黒板などのICT機器の活用を図ります。
- ❖授業では、個人発表やグループでの話し合い、アクティブラーニングの場を多く設け、意図的に主体的・協働的な学びを取り入れた授業を構築していきます。

2 家庭学習の習慣化を図る

- ❖基本的な生活習慣や学習習慣の確立が「学力向上」の基盤になることの共通理解を深め、本年度も課題となったテレビ等の視聴時間のさらなる短縮を図り、家庭学習の時間確保に努めます。
- ❖家庭学習の内容では、「家庭学習の手引き」を活用するとともに、授業と関連付けた宿題・復習・予習に継続的に取り組むようにします。
- ❖家庭と連携しながら、児童生徒が取り組んだ内容に関して、適切な評価を行い習慣化につなげていきます。

3 「かみしほろの健やかな育ち」の活用

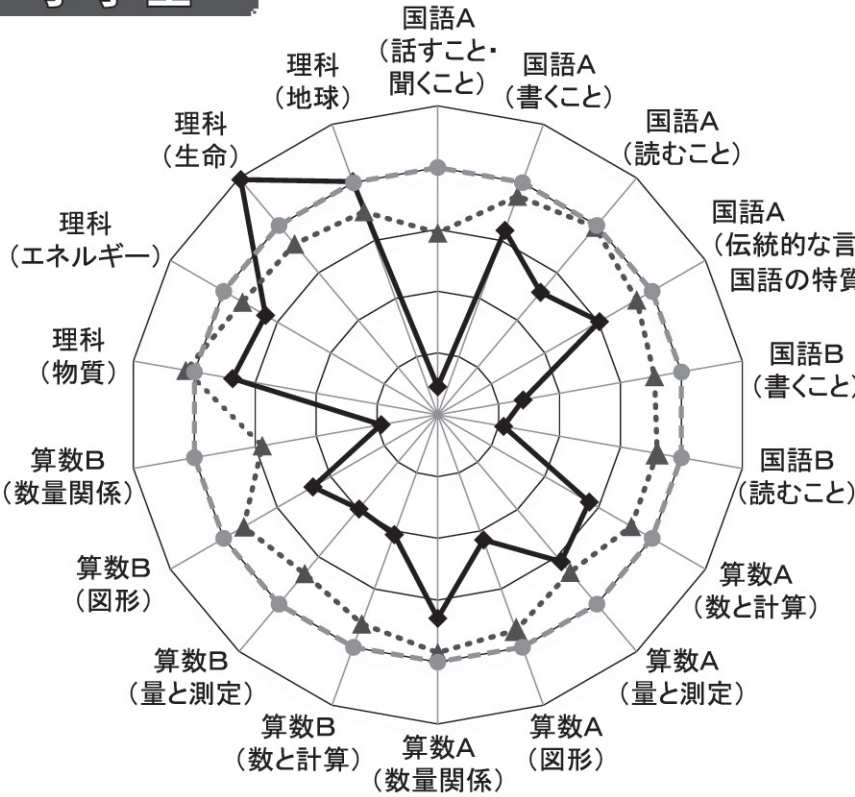
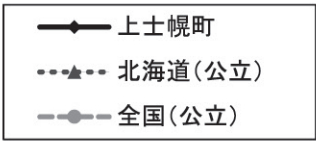
- ❖「地域の子どもは地域で育てる」を基本に、それぞれの立場で役割を果たすため、学校・家庭・地域・行政が連携・協力して、「かみしほろの健やかな育ち」(平成21年7月制定)で掲げている行動例の具現化に努めます。

4 教育環境の整備

- ❖「上士幌町子ども教育ビジョン」(平成26年12月策定)に定めた目指す子ども像の実現に向けて、地域とともにある学校づくりのためのコミュニティ・スクールの導入(平成28年4月導入予定)や幼児期から高校生まで一貫性のある教育活動を進めます。

児童・生徒の学力の傾向

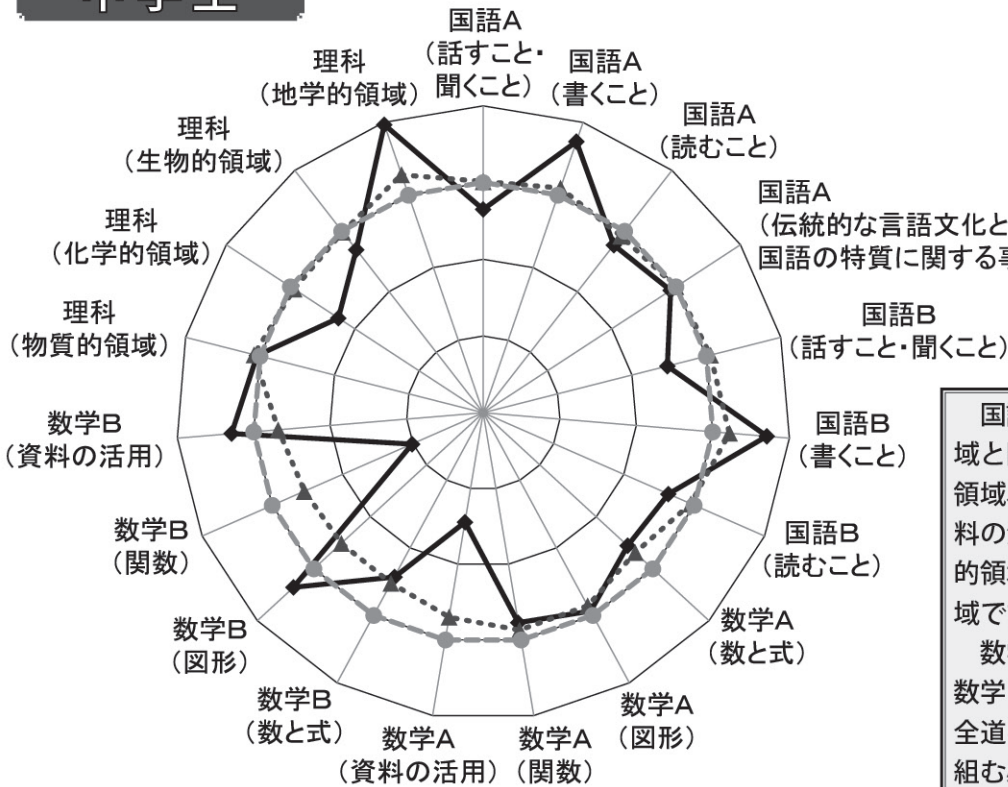
小学生



算数A「知識」の(量と測定)の領域と理科の(生命)(地球)の2領域は全国・全道とほぼ同じか、それ以上です。

国語A「知識」の(話すこと・聞くこと)と国語B「活用」の(読むこと)は、全国・全道を下回り、今後重点的に取り組む必要のある領域です。

中学生



国語A「知識」の(書くこと)の領域と国語B「活用」の(書くこと)の領域、数学B「活用」の(図形)・(資料の活用)の2領域、理科の(地学的領域)は、全国・全道より高い領域です。

数学A「知識」の(資料の活用)と数学B「活用」の(関数)は、全国・全道を下回り、今後重点的に取り組む必要のある領域です。

※お問い合わせは、教育委員会子ども課(☎2-3014)まで